

堀り下げる

陶芸家 宗像亮一



【筆者紹介】

宗像 亮一・むなかたりよういち

昭和八年六月六日 福島県会津本郷町に生れる。
 昭和二十四年三月 福島県立会津中学校三年三学期終了と同時にこの道に入る。以来、父豊意に師事し先祖伝来の陶技を学び現在に至る。

昭和二十九年 日本民芸館長柳宗悦氏の来訪を受け大いに激励さる。

昭和四十五年六月 父豊意他界し、宗像窯の七代目を継承する。

昭和四十六年 第一回日本陶芸展優秀作品賞（毎日新聞社賞）を受賞。以来毎回入選。

昭和四十八年 日本民芸館賞受賞。

昭和四十九年 カナダ・トロント世界工芸展推選出品さる。

昭和五十八年 第一回全日本伝統工芸選抜作家展に推選招待され出品。

昭和五十九年 第七回日本陶芸展推選招待され出品。第一回日本民芸館長賞（特別賞）受賞。

昭和五十九年 第二回全日本伝統工芸選抜作家展に推選招待出品。

昭和六十年 日本橋三越六階工芸サロンにて個展。第八回日本陶芸展推選招待され出品。

作陶の道を志して早や三十五年の歳月が流れた。

作陶の世界は果てしない探求の世界であり、限り無い努力と精進——作陶の過程での様々な体験が要求される。一人前の陶芸家として認められるまでには、長く厳しい修業が続けられる。

私自身、未だに自分が納得できるような作品がつかれない。プロとして誠に恥ずかしい次第である。しかし「物造り」の世界というものは、大體みなそんなものではないだろうか。後世にまで残り得るような生命の長い良い作品が、そんななたやすく出来る筈はない。——こういつてしまうとそれは物造りの逃げ、諦めなどと思われがちであるが……。

若い頃は、世の中に不可能が無いかの如く、理想も高く、ただがむしゃらに新しい物造りに挑戦するものである。当時、すでに父とともに二十二年近くも一緒に仕事をしていた私は、いとも簡単に作品を造り上げる父の仕事振りを見て、「俺だって親父の仕事ぐらい何時だってこなせるさ」などと生意気にも、また軽率にも考えていたものである。

丁度その頃、大変なできごとと直面した。

それは、父であり、師でもあった宗像窯六代目・豊意の死である。それはまさに私を今までにないどん底に落しこんだ。あんなに簡単に見えた父